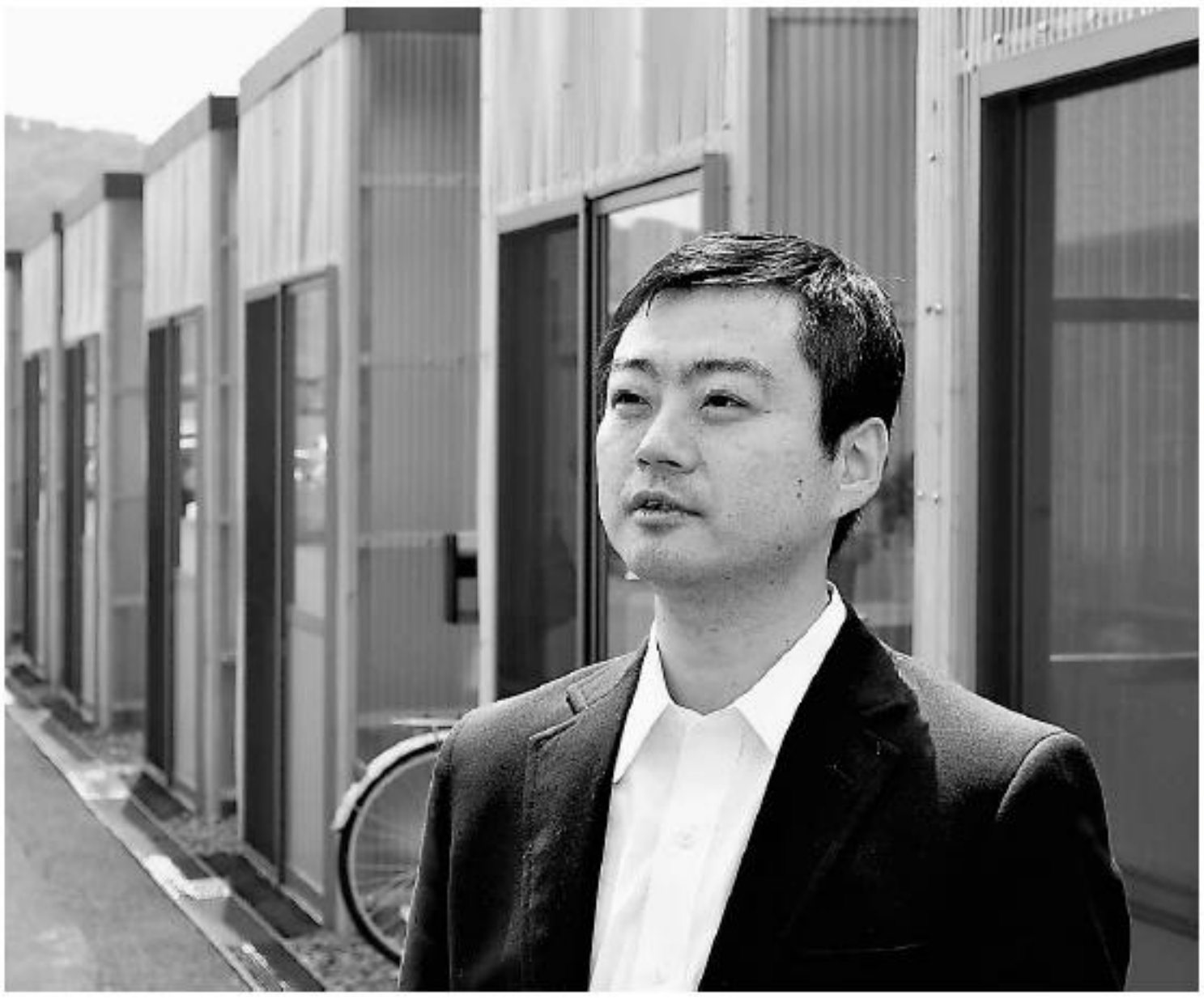
被災地の医療社会の縮図

武藤　真祐さん（41）　医師

才の国



東日本大震災で打撃を受けた宮城県石巻市。市の中心部に昨年9月、高齢者の在宅医療を専門とするプレハブの訪問診療所が誕生した。院長は毛呂山町出身の医師、武藤真祐さん(41)だ。

「震災後の昨年5月、連休に石巻を訪れ、避難所となった体育館を案内してもらった。段ボールの上で、大勢のお年寄りが身じろぎせずに過ごしていた。高齢者は慣れない避難生活で、人との関わりが少ない。じっとしていたら、元気だった人でも筋力や認知機能が衰えてしまう」

「街の中心部から離れた仮設住宅へ高齢者が移り住めば、他人との接点はさらに減っていく。被災した地元の病院や医師に、ゆとりはない。全国から駆けつけた医師も減り始めていた。寝たきりの人が増える前にどうにかしないといけない、という思いが募った」

当時の武藤さんは多忙だった。都内に訪問診療所を立ち上げてから、まだ1年余り。地域の社会的課題をテーマとする政府の研究会メンバーも務めていた。

「秋になれば仮設住宅に移る人が増えるし、寒くなって外出がおっくうになる。そうなるまでの時間との闘いだ。石巻に診療所を開設し、地元の医師に院長を務めてもらおうと走り回ったが、それぞれに事情があり、難しいという。東京と往復する新幹線の中でお年寄りたちの姿を思い浮かべたとき、何もせずにはいられなかった。昨年6月、自らが院長として往診を続けることを決めた」

10年、15年後を先取り

日本は急速に高齢化が進んでいる。この問題に危機感を抱く武藤さんは、被災地には10年、15年後の超高齢社会の困難が映し出されていると考えている。

「単身や夫婦だけで暮らす高齢世帯が特に都市部で増え、孤立化を深めていることに、危機感を募らせていた。震災の2カ月前には、高齢者を在宅医療中心に地域で支えるモデルづくりに取り組む団体をつくった」

「現在は週に4日ほど石巻に滞在し、医師仲間らと約100人のお年寄りを往診している。そこには行政の支援が届きにくく、自力では外出が難しい高齢者が増えている。お年寄りたちが日々の暮らしで、どんな支援を必要としているのかが少しずつ見えてきた。被災地は高齢化社会の縮図だと実感した」

むとう・しんすけ　1971年生まれ。96年東大医学部卒。東大病院、三井記念病院で循環器内科医として勤務し、宮内庁で侍医を務めた。2006年9月～08年11月に米コンサルティング会社「マッキンゼー」に勤務。10年1月、在宅医療を専門とする「祐ホームクリニック」（東京都文京区）を設立。米国公認会計士の資格を持つ。

日本は高齢化「先進国」の役割を担える

コンサル会社も経験

武藤さんは、大学病院で内科医としてのキャリアを重ねた。しかし、2006年には、米コンサルティング会社「マッキンゼー」に転身。異色の経歴を持つ。

「6歳の時、両親に連れられ、百貨店で開かれていた『野口英世展』を見て、医師に憧れた。世の中の役に立ちたい、という漠然とした思いがあった。他人との競争に負けたくない、昨日までの自分よりも成長したい、という思いで努力も重ねてきた。心臓カテーテル治療や救急医療にもやりがいを感じていた」

「でも、専門医では出来ないこともあるのでは、と考え始めた。医師と患者の関係でしか、自分が社会を見てこなかったことに気付き、医局の外に出ようと決めた。現場で実践的な問題解決の力を身につけようと、転職先にコンサルティング会社を選んだ。医師としてのキャリアから離れる不安よりも、やりたいことを追求しなかったことを後悔することを恐れた」

在宅医療に携わる武藤さんがめざすのは、患者の診療だけではない。高齢者の生活全般を支える仕組みをつくりあげることだ。

「あるアパートで暮らす高齢の患者さんを往診したとき、万年床に寝ている孤独な姿に衝撃を受けた。高齢者の生活全般を支え、生きがいを提供するには、医師による診療だけでは力不足だと痛感した」

「被災地では昨秋から、企業やボランティア団体と連携し、約1万世帯を戸別訪問している。医療だけでなく、介護や住まい、移動手段についての不安も聞こえてくる。保健師と情報を共有したり、住宅会社や移動ボランティアと協力したり。行政サービスが限られる中、企業やNPOとも連携し、地域を支えなければならないという思いを強くしている」

日本は、高齢化問題を解決する「先進国」の役割を担えると考えている。

「これまでの活動を通じて、変革の志を持つ大勢の人と出会ってきた。力を結集すれば、各国が直面する高齢化の課題を解決するモデルをつくることができるはずだ。次の世代が希望が持てる高齢社会を、日本はきっと実現できると信じている」

診療器具を携え、独り暮らしの高齢者宅を訪れて歩く武藤さん＝2010年9月、東京都内。武藤さん提供

普段着姿に応援の輪

武藤さんは往診の際、患者さんが余計な緊張感を抱かぬよう普段着姿で訪れる。石巻で「案内役」を務める元タクシー運転手の男性は、震災後に自分の車の後部座席で理想を語る武藤さんにひかれ、その役割をかって出たという。

取材のたびに、表情がやわらかさを増している。地域に溶け込み、土地と人への愛着が、使命感を超えて深まっているからだろう。応援の輪は広がり続けていく。（小室浩幸）

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。